

英語の色彩語について： コーパスのデータを中心に

小原真子

1. はじめに

事物の色彩を表す色彩語は視覚から入った無限の情報を有限の語で表すという点で、文化人類学、心理学など様々な分野から関心を集めてきた。本論文では、言語の面から英語の色彩語の振る舞いを観察する。具体的には、大規模均衡コーパスの先駆けと言える British National Corpus(以降 BNC)の中に現れる色彩語のデータを概観し、その性質を分析する。

基本の色彩語については、Berlin and Kay(1969)の研究を出発点とする。Berlin and Kay(1969)は、色彩を表す語の中から、*white, black, red, green, yellow, blue, brown, purple, pink, orange, grey* の11語を基本語とし、多くの言語における色彩語の数、各色彩語の焦点となる色とその色の範囲について調査した。その結果、言語によって基本色彩語の数は異なるものの、その数と種類には次のような相関性があると主張した。

$$(1) \left[\begin{array}{c} \text{white} \\ \text{black} \end{array} \right] < \text{red} < \left[\begin{array}{c} \text{green} \\ \text{yellow} \end{array} \right] < \text{blue} < \text{brown} < \left[\begin{array}{c} \text{purple} \\ \text{pink} \\ \text{orange} \\ \text{grey} \end{array} \right]$$

Berlin and Kay (1969: 4)

すなわち、言語ごとに基本の色彩語の数は違うが、すべての言語は最低2つの *white, black* に相当する基本色彩語があり、3つの場合には *white, black, red*、4つの場合には、ここに *green* または *yellow* のいずれかが加わり、5つの場合には *green, yellow* の両方とも入る。基本色彩語が6つの場合には *blue*、7つの場合には *brown*、8以上であれば *purple, pink, orange, grey* のいずれかが加わる、というように世界の色彩語の種類と数との相関を系統立てたものである。日本語に当てはめてみると、基本の色彩語は「-色」を付けずに単体で形容詞とし

て使用できる「白、黒、赤、青」の4色が基本色彩語と考えられるので、一見したところ(1)に当てはまっていないように見えるが、「青」は「青々とした新緑」、「青信号」のように、「緑」と「青」の両方が含まれる色彩語であるので、「緑」を表す色彩語の一種と考えると、基本の色彩語が4色である場合に変則的な形で該当すると言えるであろう。また、Berlin and Kay(1965)の主張の重要なもう一つの点は、基本の色彩語の焦点となる色、例えば *red* の中心的な色は、言語が違って、色彩語の数が違って、ほぼ同じであるということである。これは、人間の認識の普遍性を示すものと言えるだろう。

Berlin and Kay(1965)の研究を先駆けとして、基本色彩語の調査は現在でも各方面から行われている。例えば、Mylonas and MacDonald(2016)は、基本色彩語を下記の4つの条件を満たすものとして、母語話者の色彩の認識の仕方から検討している。

- (2) (a) be widely used in a population of speakers;
- (b) have a shared meaning for the associated colour stimulus;
- (c) be salient in the sense that the colour is easily identifiable in an array; and
- (d) be reliably distinguishable from its neighbors in colour space.

Mylonas and MacDonald (2016: 33)

すなわち、基本色彩語は母語話者の多くが使っており、他の色彩語との違いが認識できるもの、ということになる。インターネットを使った大規模調査のデータを分析した結果、Mylonas and MacDonald(2016)は上に挙げた11の基本色彩語に加えて、*lilac*, *turquoise* も他の色彩語との違いが明白で、基本色彩語の一つに加えることを提案している。

基本色彩語に対する認識の仕方は実験などを通して明らかになってきているが、その言語的な側面は人々の言語の使い方やデータの分析を通して初めて明らかになる。次のセクションではコーパスのデータから基本色彩語の分布状況を見てみよう。

2. コーパスから見る基本色彩語

このセクションでは、コーパス上での基本色彩語の分布を概観する。使用するコーパスとしては、現代イギリス英語の大規模均衡コーパスである、BNC

を利用する。BNCは1991年から1994年にかけて構築された1億語のコーパスで、データとしては1980年代から90年代にかけてのイギリス英語が収録されている。現在は、より大規模なコーパスも利用できるが、閉じたコーパスであること、またある程度データの中身を把握するためにBNCを利用することとした。

基本色彩語は形容詞として使われることが多いが、それらの粗頻度を色彩語ごとに比較してみよう。形容詞として使われる際には、比較級、最上級などもあるので、基本形と屈折形をまとめて検索を行った。その結果をまとめたものが図1である。

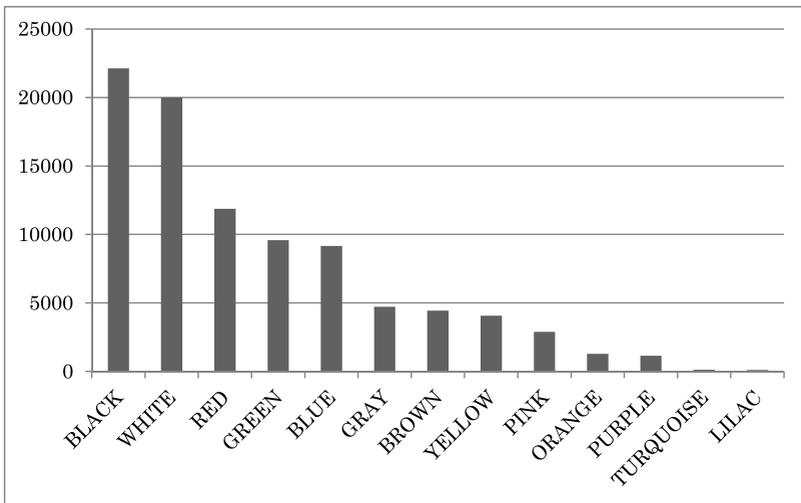


図1 基本色彩語の形容詞としての頻度

この表から、基本色彩語の使用頻度は *black* > *white* > *red* > *green* > *blue* > *gray*¹ > *brown* > *yellow* > *pink* > *orange* > *purple* となっていることが分かる。内田(2014)でも同様の頻度調査をBNCを用いて行っているが、比較すると *brown* と *gray* の間の頻度差が逆転している。内田は形容詞と名詞をまとめて検索していること、また書き言葉と話し言葉を別々に扱っていることなどからこの

¹ *gray* の頻度は *gray* とイギリス英語の綴りの *grey* をあわせたものである。

違いが生じたのかもしれない。また、内田(2014)で参照されている O'Keeffe, McCarthy and Carter(2007)にも Cambridge and Nottingham Corpus of discourse in English から基本色彩語の頻度を調査した表があるが、*black > white > red > blue > green > yellow > brown > gray > pink > purple > orange* の順番となっている。コーパスの違いにも関わらず、上位の *black, white, red* は同じであり、その後、多少順番の前後はあるが *green, blue, gray, brown, yellow* が第二グループとして続き、*pink, purple, orange* はどのコーパスでも用例が少ない。これらの頻度順とセクション1で概観した Berlin and Kay(1969)の基本色彩語の成立順と比較してみると、*black, white, red* までは高頻度のもと同じ順となっており、その後は *green* と *yellow* の間に *blue, gray, brown* などが入って、頻度が高いものとして続いている。頻度のあまり高くないものも *pink, orange, purple* と続き、Berlin and Kay の色彩語の成立過程の順とほぼ合致する。O'Keeffe, McCarthy and Carter(2007)も指摘しているように、*black, white, red* のような上位の色彩語は様々なものの描写に使われることが多い他、熟語や慣用句にも使われるなど様々な要因で頻度が高くなっているであろう。

一つ注意しなければならないのは、コーパスでの検索の際には色彩語として使われていないものも形態が同じであれば検索件数に含まれるため、上の粗頻度は、どの色彩語に関しても色彩を表していないものも含まれていることである。特に、*orange*には名詞の時にはもちろんであるが、形容詞の用例に関して果実のオレンジとして、*orange juice* が301件、*orange peel* が32件など数多く含まれているため、色彩語としての用例はかなり少なくなる可能性がある。他の色彩語についても、用法によっては色彩語でないものも相当数含まれていると考えられるので、上の図はあくまでも参考として考えた方が良いでしょう。また、比較のために Mylonas and MacDonald(2016)で基本色彩語とすることを提案されている *turquoise* と *lilac* も調査したが、それぞれ粗頻度が135件、103件とごくわずかであり、ほかの色彩語との違いは明らかである。全体としてみると、多少順番に違いはあるが、Berlin and Kay(1969)が基本色彩語とし、成立する順序が早い方に並べている色彩語の方が高頻度で使われている傾向にあると言える。

上記の頻度数からみても明らかのように、色彩語の用法の中心は形容詞である。そこで、形容詞として典型的に使われているかどうかを見るために、*as ~ as* の形式にそれぞれの色彩語が現れる頻度を調査し、表1にまとめた。

white	black	red	blue	green	gray	brown
58	42	23	20	13	9	5

pink	yellow	purple	orange	lilac	turquoise
4	2	1	1	0	0

表 1

この形式の場合、それぞれの順序は多少異なるものの、形容詞の基本形の頻度と同様に *black/white* > *red* > *green/blue* > *gray/brown/pink/yellow/purple/orange* の頻度順となっており、基本的な2色 *black, white*、その次の基本色 *red, green, blue*、また基本的な中でも程度の下がる *gray, brown, pink, yellow, purple, orange* の3グループで並んでいる。参考までに、*lilac* と *turquoise* も検索したが用例は見られなかった。また、1990年から2015年までの5億2000万語(2016年9月時点)の現代アメリカ英語のデータが収録されている大規模均衡コーパス、Corpus of Contemporary American English (COCA)でも *lilac* と *turquoise* が *as ~ as* の形式で使用されているかどうかを検索したが、用例はなかった。

それでは、比較級の頻度はどうであろうか。比較級の場合には、形容詞に *-er* を付加した形と、*more* を加えた形の2種類が存在するが、*more* 形容詞の場合、用例を見てみると数量の多さを意味するものが多く、色彩語の色としての用法でないことが多いので、接辞 *-er* を付加したものの頻度を見てみよう。頻度は表2の通りである。参考までに、BNCからの用例を(3)に1例ずつ載せた。用例の強調は筆者によるものである。

green	white	red	black	gray	brown	blue
144	86	57	54	40	31	15

pink	yellow	orange	purple	lilac	turquoise
15	7	0	0	0	0

表 2

- (3) a. The man said, how is it your grass is **greener** than next door?
 b. Her face was **whiter** than the chalk dusting it.
 c. They all got hotter and **redder** and shinier and fatter.
 d. I've never seen a **blacker** car in my life!
 e. The light became **greyer** and smokier.
 f. His moustache somehow was yet **browner** than his hair.
 g. his eyes managed to look **bluer** and sharper than ever,
 h. The girl blushed even **pinker**, and stood up straight.
 i. Colours also may get distorted as the eye lens gets **yellow**er with age; …

比較級の場合には、*greener* と *grass* との共起例が27件もあることによって *green* の頻度が多くなっているが、これは、ことわざの “The grass is greener on the other side.” (よその芝生はうちの芝生より青く見える) (『リーダーズ英和辞典』) の影響であろう。それ以外の用法も順番は少し異なるが、*white*, *red*, *black* の高頻度のグループと、それ以外というように分けられる。また、*as ~ as* の形式と同様に、比較級の形式でも *lilac*, *turquoise* の用例はなく、色彩語として様々な形式で使われるという状況ではないことが分かる。この場合も、COCA の検索も行ったが、用例はなかった。

色彩語の基本である形容詞の用法では以上のような傾向にあったが、英語ではそのままの形態で他の品詞に転用する転換の例が多い。色彩語も例外ではなく、動詞としての用法がみられる。これらの動詞の用法をその屈折型も含めて検索をした。

black	gray	brown	green	blue	yellow	purple
170	138	122	30	18	16	4

red	pink	white	orange	lilac	turquoise
2	1	0	0	0	0

表 3

表 3 に見られるように、動詞としての用法の頻度が高いかどうかは形容詞や名詞の頻度と全く相関関係がみられない。BNC からいくつか用例を見てみよう。

1つ1つ検討すると、動詞としてタグ付けはされているのであろうが、動詞とは考えられないものもあったので、明らかに動詞として使われている用例だけを(4)に挙げる。

- (4) a. Broke his nose, split his lip and **blackened** his eye …
 b. The Captain's white face had **greyed**, his small mouth tightening into a cruel line.
 c. Once they are well **browned**, add the next four ingredients.
 d. The teeth it exposed were **greened** with mould, and sharpened.
 e. Stilton is **blued** by using the Roquefort penicillium and should always be creamy and not crumbly.
 f. a joyless room filled with oil paintings of rural scenes **yellowed** by age.
 g. and twisted until the boy's cheeks **purpled** and his eyes began to swim.

Black は *black out* の形で使われているものが88例もあるなど、それぞれの語で多く見られる用法に特徴があるが、(4)のように、動詞として使うことができる基本色彩語がある一方で、*white* のように動詞としては使われていないものがある。ここで一つ考慮に入れなければならないのは、*white* には *whiten* という別の形態の動詞形があることである。同様の動詞形がある *blacken*, *redden* も屈折形も含めて用例数を調査したところ、*whiten* 55件、*blacken* 149件、*redden* 122件であった。これらの数を上記の表に足してみると、下記の順番になる。

black	gray	red	brown	white	green	blue
319	138	124	122	55	30	18

yellow	purple	pink	orange	lilac	turquoise
16	4	1	0	0	0

表 4

表4を見てみると、*white* は *whiten* の用例を含めたとしても、基本色彩語の中での件数としては多くない。動詞として使われている色彩語を多い方から見てみると、*black*, *gray*, *red*, *brown* など比較的明度が低い、濃い色彩に分類される

ものが多い。これは、動詞として「～色にする／なる」という意味を表す際には明度が低い色への変化の方が適しているためではないかと考えられる。やや薄い色に変化させる場合でも *white, blue, green* などに見られるように、顔色の変化やカビなどの発生による自然な色の変化を必要としていることが見てとれる。件数は少ないが、*yellow, purple* なども同様で、自然に黄ばんでくこと、顔色が変わること²など、どちらかという状態が自然の成り行きで変化することに對して使われている。なお、今回、調査に加えた *lilac* と *turquoise* に関しては、動詞としての用法は見られなかった。

以上、このセクションでは、コーパスのデータから基本色彩語の分布を観察した。形容詞として使われている頻度順は Berlin and Kay (1969) の提唱した色彩語の順番にほぼ合致し、高頻度のものから *black/white > red*、その下に *green/blue* が来て *gray/brown/yellow/pink/orange/purple* などそれ以外の色彩語が続く。より基本的な色彩語がより多く使われると考えると、この結果は妥当なものと考えられる。比較級など、文法形式を変えるとその文法形式で使われる特有の色彩語の頻度が高くなるなどの傾向はあるが、最も基本的な色彩語である *black/white/red* が多いことに変わりはない。なお、動詞用法の場合には様相が変わり、*white* の頻度は比較的低い。これは、色が変わる時にはより濃い方に色が変わることが多く、そのことを表した用例が多いことから来たものであると考えられる。また、今回は Mylonas and MacDonald (2016) が基本色に加えることを提案している *lilac* と *turquoise* も調査対象とした。これらの色彩語は、他の色との違いは認識され、区別はされているのであろうが、色彩語として見た時には、典型的な基本色彩語とは異なり、形容詞としての用例が少なく、比較級・動詞形など文法形式を変えた時の用例もないなど、言語面から見た時には、基本色彩語として使われていると言うには定着度が足りないと言えるであろう。

3. 共起語から見た色彩語

セクション2では、BNCに見られる基本色彩語の粗頻度を比較したが、色彩語の使用の実態を見るために、このセクションでは、各色彩語の共起語を見

² 今村 (2009) が19世紀のイギリス小説のテキストから観察しているように、*purple* は日本語の紫色よりも赤に近い色を含むとすると、顔色の表現として自然だと考えられる。

てみることにしよう。色彩語の意味は Wierzbicka(1990)が論じているように、どのように色そのものを識別しているかだけでは測れない。Wierzbicka(1990:99)は、色彩の概念が“universals of human experiences”に根差していること、例えば、*black*と*white*であれば何も見えない「闇」とその反対の「光」、*green*であれば「植物」、*blue*であれば「空」、*red*は「火」や「血」、*yellow*は「太陽」を思い起こさせるものであるという主張をしている。それでは、色彩語と関連していると言われているものが、コーパス上では共起して使われていることが多いのであろうか。それぞれ確認してみよう。検索の際には、色彩語は形容詞の基本形で直後に名詞が使われている形式を検索した。また、名詞は単数形・複数形の屈折形をまとめて検索を行った。

まず、*blue*を確認してみよう。BNCで*blue*が形容詞で直後に名詞が来るものを多いものから10位まで見てみると、表5の通りとなる。

順位	名詞	数
1	EYE	826
2	SKY	270
3	LIGHT	119
4	ARROW	73
5	WATER	66
6	BOOK	65
7	JEANS	65
8	CHIP	64
9	SUIT	58
10	DRESS	57

表5 *blue*が形容する名詞

*Blue*の場合には、「目」の色を修飾していることが最も多いが、やはり「空」の色が2番目に来ており、関連性の強さが伺える。また、*blue*の場合、「ジーンズ」「スーツ」「ドレス」など衣服の色を表すことが多いのも特徴であろう。また、どの色彩語にも言えることであるが、*blue book*（政府の報告書など）や*blue chip*（優良株）など熟語になっているものは頻度が高くなる傾向にある。

しかし、この方法では*blue*以外の色彩語では高頻度の共起語の中に

Wierzbicka(1990)が主張する、色彩語が根差している自然物が上位にくることはない。たとえば、*yellow*では表6からわかるように、*yellow pages*（職業別電話帳）、*yellow line*（駐車禁止の線）、*yellow card*（イエローカード）、*yellow jersey*（自転車レースの）黄色のジャージ）などの熟語が検索語の上位を占め、*yellow sun* は65番目で7件の用例しかない。

順位	名詞	数
1	PAGES	101
2	LINE	89
3	LIGHT	65
4	CARD	64
5	FLOWER	60
6	BOOK	56
7	EYE	45
8	ONE	36
9	HAIR	31
10	JERSEY	30

表6 *yellow* が形容する名詞

それでは、今度は逆に、「空」、「火」、「太陽」などの直前に現れる色彩語には何が多いのか、という観点からコーパスのデータを見てみよう。なお、以下の表からは、件数が5より少ないものは割愛した。さて、*blue*のデータから予測されるように、「空」を形容する色彩語としては表7のように*blue*が多い。この他に(5)の例にあるように、天気が悪い時は*gray sky*、夜の空を*black sky*、朝焼けなどを*red sky*のように色彩語で形容しており、時間や状況で変わる「空」の様子を表している。しかし、圧倒的に多いのは*blue*であり、強い関連性が見られる。

順位	色彩語	数
1	BLUE	270
2	GRAY	62
8	BLACK	18
13	RED	14

表7 *sky* を形容する色彩語

- (5) a. There's a **blue sky** out there.
 b. The dense **grey sky** seemed denser than before, so grey in places that it seemed almost green.
 c. Over her shoulder the stars twinkled in the **black sky**.
 d. **Red sky** in the morning

色彩語の方から見ても、自然物の方から見ても、Wierzbicka(1990)が論じている色彩語と関連する自然物の中では *blue* と「空」の結びつきは強いが、他の色彩語ではどうであろうか。この他に色彩語との比較的強い共起関係を見せるのは、植物の一種である、表8の *grass* (「草」「草地」)である。

順位	色彩語	数
2	GREEN	65
18	BLUE	8
28	BROWN	6
38	YELLOW	5

表8 *grass* を形容する色彩語

Grass の場合は一番多く共起する色彩語は *green* であり、Wierzbicka の主張に合致する。その他、*blue*, *brown*, *yellow* なども形容することがあるが、件数としては少数である。このうち、*brown*, *yellow* は *grass* が枯れている状態の形容として使われているが、*blue grass* は草の名前や米国南部のカントリーミュージックの名前(『リーダーズ英和辞典』)であり、固有名詞として使われているものである。

植物の別の例として、*leaf* を形容する色彩語を見てみよう。ここでもやはり

件数が多いのは *green* であるが、「葉」には様々な色があることから、*yellow*, *brown* を初めとして、種々の色彩語が使われている。

順位	色彩語	数
11	GREEN	21
13	YELLOW	19
25	BROWN	10
28	GRAY	9
38	PURPLE	6
39	RED	6

表9 *leaf* を形容する色彩語

次に、*black* との結びつきが強いと Wierzbicka が論じている「闇」の一種として、「夜」を見てみよう。*Night* と共起するものの中では *black* は22番目³で、それほど多いという訳ではないが、色彩語の中では最も多く、*white* が2番目である。*Black* は、例えば *In the black night outside, the wind screamed,...* のように使われている。*White night* (白夜) は固有名詞であり、色彩語として使われている訳ではないと考えられるため、「夜」を形容する色彩語としては *black* が主要なものということになる。

順位	色彩語	件
22	BLACK	27
101	WHITE	6

表10 *night* を形容する色彩語

次に、*red* と関連が高いと Wierzbicka (1990) が論じている「血」及び「火」の直前に現れる色彩語を見てみよう。まず、*blood* に関しては、表11の通りである。

³ *Night* と共起するものとしては、色彩語ではないが、*dark* の方が数が多く、94件である。

順位	色彩語	数
2	RED	100
4	WHITE	66
44	BLUE	8
45	BLACK	8

表11 *blood* を形容する色彩語

Red, white の順に頻度が高いが、これには注意が必要である。*Red* は、(6a)に見られるように、「赤い血」の意味で使われている用例もあるが、100件のうち、76件が(6b)と同様の *red blood cell* (赤血球) の用例である。また、*white* も同様に、66件のうち、64件が(6c)のような *white blood cell* (白血球) の用例である。これらは、色彩語の用例とは言い難い。*Blue blood* についても同様に、(6d)の例に見られる「貴族の血統」(『リーダーズ英和辞典』)という意味で使われているものがほとんどである。色彩語として残るのは *red* と、(6e)のように、凝固しかけの血の形容として使われている *black* の2つであり、「血」を形容する色彩語は典型的には *red* ということになるであろう。

- (6) a. He took his hand away and looked at the smear of **red blood** on his fingers.
 b. Thousands of **red blood cells** are crushed by the impact of your feet with the pavement,
 c. It eliminates **white blood cells** that could react against the body's own normal cells.
 d. the idea of a medieval aristocracy 'of service', to insist on **blue blood** for the great lines of the tenth and eleventh centuries,
 e. Jack glanced across the table at Ray Shepherd, on whose shoulder **black blood** was congealing.

それでは、同様に *red* との結びつきが強いと論じられている「火」はどうか。この場合は、表12にあるように予想に反して *black, blue* が BNC では件数として多くなっている。

順位	色彩語	数
16	BLACK	20
28	BLUE	13
31	RED	11
36	WHITE	9
43	GREEN	7

表12 *fire* を形容する色彩語

このうち、*black* に関しては、*Black Fire Pass* という固有名詞の一部で使われているものが多かった。調べたところ、ゲームの中の用語であったため、これは色彩語の例からは外して考えるべきであろう。その他の色彩語の例を一つずつ挙げる。

- (7) a. Damian snatched the phone from her hand, eyes like **blue fire**.
 b. No phoenixes rising reborn from the raging **red fire**.
 c. Now the sun is burning down on Earth with a **white fire**.
 d. She kept her lashes lowered to hide the raging **green fire** of her eyes.

(7a,d) にあるように、*blue, green* に関しては、「火」の色という意味ではなく、目や宝石などの「光」の色として使われている用法がほとんどであった。これらのことから考えると「火」の色としては、*red, white* が典型的と言えるであろうが、「火」の直前に現れる形容詞全体の数から比べると、それほど用例数が多いというわけではない。

また、「炎」を意味する類義語の *flame* を修飾する形容詞の場合も、*red* で形容されることは多くなく、*blue, orange, yellow* などが上位となる。

順位	色彩語	数
2	BLUE	26
5	ORANGE	13
7	YELLOW	12
10	RED	9
20	GREEN	5

表13 *flame* を形容する色彩語

それぞれの例を見てみると、*blue flame* に関しては、(10a,b)にあるように、「炎」の色を形容するものもあるが、*fire* の場合と同様に、(10c)の目の「光」という意味に使われているものもある。他の色彩語に関しては、*orange* は暖炉の「炎」、*yellow* はコンロまたはストーブの「炎」、*red* は太陽の「輝き」を意味しており、「炎」「輝き」などを形容しているが、*red* との共起例はそれほど多くない。

- (8) a. The carbon monoxide burns with a **blue flame**.
 b. She had been even more excited as the **blue flames** whipped from the bulky Boeing's engines
 c. His eyes were like **blue flames**, she thought, drawing her irresistibly into his fire.
 d. She was tempted to ignore any suggestion that he made, but the **orange flames** that flickered in the grate looked invitingly warm,
 e. The first few times I lit the stove, up popped **yellow flames** and I turned it off.
 f. It was a perfect summer dawn and the **red flames** matched the red disc of the sun as it rose over the misty hedges.

それでは、*yellow* と関連すると Wierzbicka(1990)が論じている「太陽」はどうであろうか。こちらは、基本色彩語ではないが *golden*、また *white* が共起するものとしてはもっとも多く、それに次いで *yellow*、*red* と続く。太陽が照る様子は、特定の色彩語ではなく、様々な色彩語で表現されているようである。また、*yellow* との共起例は7件であり、関連はそれほど強くないことが伺える。

順位	色彩語	数
13	GOLDEN	11
16	WHITE	10
24	YELLOW	7
26	RED	6

表14 *sun* を形容する色彩語

それぞれの色彩語と *sun* が使われている例を (9) に挙げておく。

- (9) a. A **golden sun** filled the air with light, and green sea lapped the sand.
 b. just as acceptable as the actual, intensely bright degree, circular, unpolarised **white Sun** which the bees see almost every day in the normal sky.
 c. thus the white Rigel in Orion is hotter than our **yellow Sun**, while the orange-red Betelgeux and Aldebaran are decidedly cooler.
 d. In the late afternoon, with the **red sun** setting and the dust from the caravans crossing the plain hanging on the air,

このセクションでは、Wierzbicka (1990) が色彩語の意味が根差しているものとして挙げている自然物と色彩語との共起関係をBNCのデータから観察した。共起頻度の高さは一様ではなく、「夜」と *black*、「空」と *blue*、「草」や「葉」と *green*、「血」と *red* のように、色彩語と関連すると言われている自然物を形容するものとして当該の色彩語が多く使われているものと、「太陽」、「火」のように *yellow*, *red* と関連していると言われているが、それほど共起頻度が高くないものとの2種類に分かれた。なぜこのような違いが生じるのかについては今後の課題としたい。

4. おわりに

本論文では、英語の基本色彩語のコーパス上における分布を様々な面から概観した。まず、セクション2では、Berlin and Kay(1969)で論じられている基本色彩語11語の分布を形容詞として使われている場合、*as ~ as*、比較級、転換動詞などの形式に関して頻度を調査し、どの色彩語が多く使われているのか観察した。先行研究にあるコーパスの頻度調査も参考にすると、形容詞では、

Berlin and Kay (1969)で成立順が早いとされている *black, white, red* が高頻度、*green, blue, gray, brown, yellow* が第二グループとして続き、*pink, purple, orange* が低頻度、ということになる。より基本的なものは頻度が高くなると言えるであろう。文法形式を変えると、熟語などの影響で特定の色彩語の頻度が高くなる。また、Mylonas and MacDonald (2016)が色彩語の認識のデータから基本色彩語として *lilac* と *turquoise* を加えることを提案しているが、コーパス上の分布からは他の基本色彩語との差は明らかであり、未だ基本色彩語としての地位は得ていないのではないかと考えられる。

セクション2では、Wierzbicka (1990)の主張する基本色彩語に関連の深い自然物と色彩語が共起する頻度は高いのかどうかをコーパス上のデータから検証した。Wierzbickaの主張通り、特に「空」と *blue* は共起して現れることが多かった。また、「草」「葉」と *green*、「夜」と *black*、「血」と *red* なども共起している例は多く、これらの自然物が当該の色彩語との関連が高い、ということと言えるであろう。ただ、「火」、「太陽」はそれぞれ *red, yellow* と関連していると主張されているが、コーパス上のデータでは共起例は多くなく、同様な傾向は伺えなかった。これらの理由に関しては、今後の課題とする。

今回の調査では、BNCを主に使用した。今後はCOCAなども利用してアメリカ英語での色彩語の使用状況も調査する予定である。また、形容詞に名詞が後続する場合に限って共起関係を調べたが、他の文法形式、たとえば形容詞の叙述用法などでは、分布が異なることが考えられる。今後の課題としたい。

参考文献

- Berlin, Brent and Paul Kay (1969) *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*, Berkeley: University of California Press.
- Mylonas, Dimitris and Lindsay MacDonald (2016) "Augmenting Basic Colour Terms in English," *Color Research and Application* 41, 32-42.
- O'Keefe, Anne, Michael McCarthy and Ronald Carter (2007) *From Corpus to Classroom: Language Use and Language Teaching*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Wierzbicka, Anna (1990) "The meaning of color terms: semantics, culture, and cognition," *Cognitive Linguistics* 1-1, 99-150.
- 今村潔 (2009) 「Purple が示す色彩」『龍谷紀要』第31巻、41-52.

内田富男 (2014) 「コーパスと英語教育語彙表における基本色彩語の考察— BNC, JEFLL Corpus, CEFR(-J)を用いて—」『明海大学研究紀要 - 人文学部』第50号、19-32.

辞書

『リーダーズ英和辞典』第3版(2012, 2015)研究社.

コーパス

British National Corpus (<http://corpus.byu.edu/bnc/>)

Corpus of Contemporary American English (<http://corpus.byu.edu/coca/>)